

今週のトピック – 2015年5月2日 (注：データのみ5月27日まで更新)

ドイツ国債に急速な金利上昇が起きていますが、今回は過去の日本国債の動きと比較してみます。

日本国債の転機点：10年ドイツ国債は日本国債の動きに重なる

2003年の10年日本国債は6月まで順調に利回りを低下させ、過去最低水準である0.4%に到達した後に、6月13日から19日の間に0.24%利回りが上昇しました。日本国債の利回り上昇のそもそもの契機は、6月17日行われた20年国債の入札が不調と市場に受け取られたことにあります。その結果、金融機関による利食いやヘッジファンドによる売りが起こり、ポラティティが高まったことでさらに投資家の売りを促すという状況になりました。

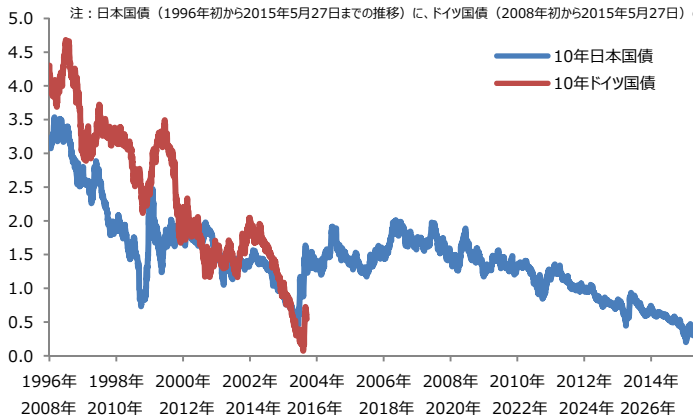


デビッド・ライリー

パートナー兼クレジット戦略ヘッド

図1 10年日本国債と10年ドイツ国債の動き

注：日本国債（1996年初から2015年5月27日までの推移）に、ドイツ国債（2008年初から2015年5月27日）の推移を重ねたグラフ



出所：ブルームバーグ 2015/5/27時点

下落の第二弾は6月25日の米連銀の0.25%の**利下げ**がきっかけとなりました。予想よりも利下げ幅が小さかったことで10年米国債は0.3%上昇し、欧州と日本も数日遅れで影響を受けました。日本国債の急激な下落とポラティティの高まりによって、投資家は他の市場でも同じようなことが起こる可能性があることを意識しました。日本国債はその後も、経済指標が予想よりも良かったことを背景に下落を続け、7月4日には1.4%まで利回りが上昇して、1.05%まで一旦低下しました。グローバルでの債券の下落の第三弾は、米連銀のグリーンズパン理事長の議会証言が契機になりました。その証言内容はタカ派と受け止められ、米国10年債は2003年7月の後半で0.75%もの利回り上昇となりました。日本国債の下落の第四弾で日本国債は8月の終わりまでに再度1.47%まで金利が上昇しました。強い経済指標がその背景にありましたが、実はこの時期、日本銀行は国債の買い入れを行っていました。日本銀行は2001年3月に主要国の中央銀行で初めて量的緩和策を行っていたのです。